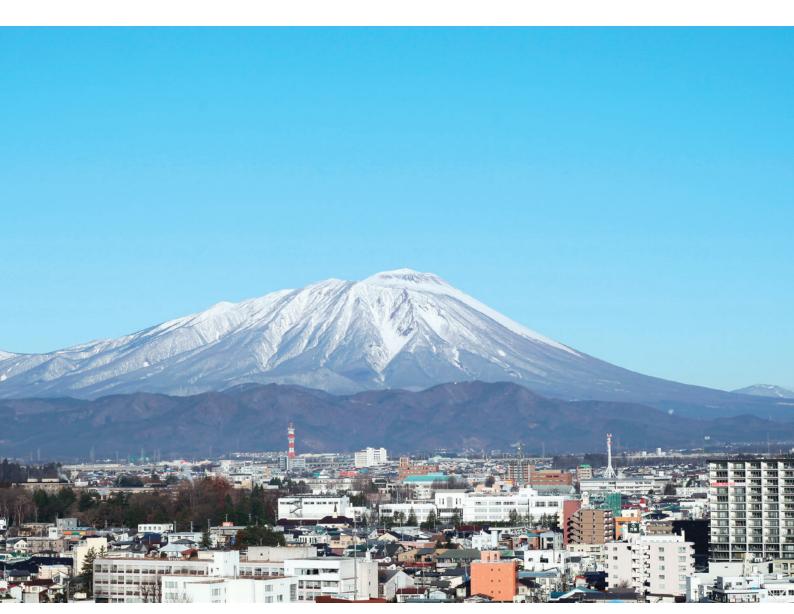
#### **IWATE MEDICAL UNIVERSITY NEWS**

# 岩手医科大学

2016. 1 No. 472



青空に浮き出る岩手山(創立60周年記念館屋上にて撮影)



#### 新年のご挨拶

表彰の栄誉

岩手医科大学の震災復興の取組みについて

第1回岩手医科大学跡地活用検討懇話会が行われました

すこやかスポット医学講座No.62

「血管腫と血管奇形のお話」

## 新年のご挨拶

#### 長 小川 彰 学



けましておめでとうございます。 皆様におかれましては、ご家族とも どもご健勝で新年を迎えられたこととお慶び 申し上げます。

岩手医科大学は創立120周年をあと1年後 に控えております。来年4月には大々的に式 典を挙行する予定でございます。

立120周年事業の大きな柱、矢巾への 本院移転事業は、昨年、アベノミクス、 消費増税、円安、復興特別会計の時限による 駆け込み事業の増大、オリンピック特需など による物資高騰が大きくのしかかり、移転計 画当初より建築費は1.5倍に増大し危機的状 況に陥りました。そこで、岩手医大方式によ る建築、電気設備、機械設備の3つを分割し て再見積もりを各企業に依頼し、提案をいた だいたところ、どうにか新病院移転のめどが 立ち、昨年末、仮契約までこぎつけることが できました。

向後3・4ヶ月かけて基本設計の見直し を行い、4月には実施設計に入り、今秋に は着工の予定です。着工時期は遅れますが、 完成は予定通り平成31年となり、開院時期 を変更することなくスタートできる予定でご ざいます。

しかし、新病院完成で事業が終わるわけで はございません。その先には内丸メディカル センターの新築、内丸再開発を控えており、 まだまだ資金調達に予断を許しません。

に新病院に関しては、世界に誇る、 日本一、東洋一、世界一を目指した 高規格の新病院でなければ移転する意味が ありません。内丸メディカルセンターの整 備、古い建造物の整理、都市計画の中での 内丸地区の再開発など、大学の経営改革が 必須で、将来に亘る内丸再開発が出来るだ けの余裕を持って進めなければなりません。 そういう意味で、本年は120年の歴史の中で 大きな第一歩ともなる勝負の年と言えるで しょう。

員の皆様にはこの状況を十分ご理解 いただき、一致一丸となって120周年 事業を実現できる経営体質になるよう、各部 門で頑張っていただきたいと思います。

どうか今年1年くれぐれもご健勝で、ご活 躍いただきますよう祈念いたしまして、年頭 のご挨拶といたします。



矢巾新附属病院 完成イメ-



#### 浪岡 多津子 歯科衛生士が日本歯科衛生学会で学術発表優秀賞・ 公益財団法人ライオン歯科衛生研究所賞を受賞しました

この度、日本歯科衛生学会第10回大会(平成27年9月20日~21日、札幌市)において、浪岡多津子歯科衛生士の演題「東日本大震災発生後の歯科用物資支援に関する調査 第1報 震災後の生活場所と物資受取状況」が学術発表優秀賞・公益財団法人ライオン歯科衛生研究所賞を受賞致しました。これは、前年度開催された第9回学術大会の169演題(口演46題・ポスター123題)の中から選ばれたものです。

この研究は、「岩手県における東日本大震災被災者の支援を目的とした大規模コホート研究」の平成25年度対象者1,495名にアンケート調査を実施し、東日本大震災直後の生活状況と歯ブラシなどの歯科用物資受取状況との関連を明らかにしたものです。調査結果では、受取状況には居住場所によって差異があり、避難所以外には行き渡りにくかったことなどが示され、今後の災害支援の在り方についての有用な資料であると考えます。



#### 細野 友治 調理師・簗場 悦子 看護師が 文部科学大臣表彰 (医学教育等関係業務功労) を受賞しました

栄養部の細野 友治調理師(左)と看護部東病棟 9階の簗場 悦子看護師(右)は、平成27年度の 文部科学大臣表彰(医学教育等関係業務功労)を 受賞しました。

この賞は、国立、公立及び私立の大学における医学又は歯学に関する教育・研究若しくは患者さんの診療等に係る補助的業務に関し顕著な功労のあった方々を表彰することにより、関係職員の士気を高揚し、医学又は歯学教育の充実向上を図ることを目的として、昭和49年から実

施されています。

細野調理師は、長きにわたり病院給食に従事し、 常に患者さんの立場を考えた病院給食提供に貢献 されたほか、栄養部内の緩和ケアチームを担当し 個別対応食に高度な技術を発揮されました。

築場看護師は、長きにわたり看護師として患者 さんの安心・安全な療養の提供に精励されたほか、 看護研究にも取り組み、褥瘡リンクナースの一員 として、褥瘡予防ケアの充実に大きく貢献されま した。



栄養部 細野 友治 調理師



看護部東病棟9階 簗場 悦子 看護師

### 岩手医科大学の震災復興の取組みについて

平成23年3月11日に起こった東日本大震災津波から5年が経過しようとしています。

本学は、発災直後から岩手県の基幹災害拠点病院として、全力を挙げて医療支援活動を行ってまいりました。 その後、本学が担ってきた様々な復興事業を有機的に連携させ、より実効性の高い組織的な活動を行うため、 学内に災害復興事業本部を設置しました。

今回の岩手医科大学報では、昨年10月28日(水)に行われた災害復興事業本部の活動報告会で発表された、 7つの取組みについてお届けします。

#### Report 1

#### 岩手県医療情報連携ネットワークシステム

この事業は、震災によりカルテ等の医療情報が沿岸で失 われた事態と医療過疎の4医療圏でさらに医師不足が進ん だことを受け、ICTを利用して支援することを目的として

テレカンファランス(HDTV会議等を通じた相談等) による医療連携、医療情報リポジトリによる医療連携 の2つの事業により、医療情報の共有と保全を進めて います。

当初久慈・宮古・釜石・大船渡の4つの県立病院(災 害対応の基幹病院)との医療連携から始まりましたが、 その後平成26年度には八戸赤十字病院と、さらに岩手 県医師会高田診療所とも連携を進めてきました。

テレカンファランスによる医療連携は、国内でこれま でなかった形ですが、電子カルテの端末をテレビ電話の 端末として共有することで行っています。当初は、画像 診断が重要な小児科・循環器科・脳外科などが中心に使 用を始めたのですが、その後、遺伝やこどものこころの ケアなどのカウンセリングでも使われるようになりまし た。他に放射線の治療機器はあっても治療の専門医がい ない場合など、大学側で支援することができます。最近 ではこれを教育にも用いるようになり、現在58台の端 末(本学29台、県立久慈病院5台、県立宮古病医院11 台、県立釜石病院5台、県立大船渡病院5台、高田診療 所1台、八戸赤十字病院2台)で運用しています。平成 26年1月から本格稼働しており、平成27年9月の時点 で 463 回利用されています。様々な診療科で使用するよ うになってから特に利用が伸びていますが、中でも、宮 古病院との間での使用実績が多いです。

医療情報リポジトリですが、リポジトリを有している 本学と大船渡病院との間で試験的に運用しています。本学

#### 総合情報センター センター長 小山 耕太郎

(小児科学講座 教授)



における主たる使用方法は、大学病院の医療情報の保全 で、これまで約20万人、容量にして77テラバイトの医 療情報を矢巾キャンパスに保存しています。併せて、東 北電力とは異なる電力会社管内の遠隔地にバックアップ を有し、大災害時にも二重のバックアップで対応するこ とができます。

大船渡病院との連携では、①患者基本情報、②投薬・ 注射、③検査、④画像、⑤レポートの基本情報を共有し ています。今後共有した方が良いと思われる情報として、 サマリー、コンサルテーション、紹介状等の各種文書情 報が挙げられます。これは、診療所などの先生と連携し ていくような場合に必要になるほか、介護の分野でも有 用と思われるためです。共有している情報は、時系列で 見ることができます。

今後これらの事業は、岩手県医療情報連携推進協議会に 吸収・統合されていくものと予想しています。協議会での 検討対象システムは、①医療情報リポジトリ・レジストリ システム、② HDTV会議システム、③遠隔放射線画像診 断システム、④遠隔病理画像診断システム、⑤通信ネット ワークインフラです。

事業終了後の保守料をいかに節減するかが課題と考え ています。また、これらの事業で得られたノウハウを、 盛岡医療圏など内陸の医療圏でどのように利用するかを 医師会の先生方から意見を伺うなどして進めていきます。

#### Report 2

#### 災害時地域医療支援教育センター

本事業は、文部科学省の大学等における地域復興のためのセンター的機能整備補助金によって平成23年度から始まり、今年度が最終年度です。また、災害時地域医療支援教育センターでは、岩手県から事業の委託も受けています。

当センターは、東日本大震災津波の際に本学が実践した行政との連携による被災地支援等を踏まえ、災害時の緊急医療支援体制を含む総合的地域医療支援体制を拡充・強化するための教育・研究拠点を目指し、設立しました。

主な取組みとして、①東日本大震災津波の問題点の抽出と情報の収集・検証、②災害時対応医療人の育成(沿岸への医師派遣事業を含む)、③遠隔医療ネットワークシステムの構築、の3つがあります。

①は4つの課題を整理しており、(イ)災害急性期(20日間)における患者搬送と病院避難に関するデータ整理は、内陸に移動した患者のデータをまとめており、ほぼ完了しています。(ロ)救護所における診療録データの整理については、沿岸の7市町村200カ所の救護所で使われた8万冊の診療録がありますが、昨年報告書の作成に至っています。(ハ)避難所における生活環境実態調査データの整理については、避難民が100人以上の避難所50カ所で生活支援に必要なデータの調査を4カ月間行い、現在報告書の作成を進めています。(ニ)「いわて災害医療支援ネットワーク」の活動記録の整理については、東日本大震災津波の際、岩手医大が中心となり、県庁の中に「いわて災害医療支援ネットワーク」を立ち上げ、県全体の医療の調整を行ったわけですが、そこでの活動記録の整理や報告書作成を行っています。

#### 災害時地域医療支援教育センター センター長 **眞瀬 智彦**

(災害医学講座 教授)



続いて、②に関してですが、東日本大震災津波の問題 点として、本部を運営する人材がいなかったことが挙げ られます。そこで、本部を下支えするロジスティックに 焦点を当てた人材育成を、また医師については、阪神淡 路大震災では外傷医療に対する人材育成が中心でした が、東日本大震災津波では、総合医に近い医師の養成が 必要であったことが指摘されました。このような課題 に対応する人材を育成するため、日本災害医療ロジス ティックス研修を中心とした6つの研修を実施していま す。また、小中高校に出前講義による災害医療の基礎知 識や防災知識に関する講演を行っています。

③については、先程小山総合情報センター長からご説明があったとおりです。

今後の取組みとしては、東日本大震災津波の問題点の 抽出と検証の完了、人材育成については研修を少し絞り つつも引き続き行っていきたいと思います。また、遠隔 医療についても岩手県と連携しながら推進していきたい と考えています。

岩手県委託事業では、災害医療コーディネーターの研修、救助関係者向けの研修、保健所で働く保健師さん等への研修、岩手DMAT隊員養成の研修、災害医療従事者EMIS研修を引き続き実施していく予定です。

#### Report 3 岩手県こころのケアセンター

当センターの目的は、岩手県全体のこころのケアを推進していくために、関係機関と連携しながら、こころのケアに係る専門的な支援を行うとともに、その支援を行う専門職の人材育成を行い、きめ細やかで専門的なこころのケアを中長期にわたり実施することです。

センターの体制は、センター長1名、副センター長1名の他、精神保健に関する専門職31名、事務職14名で運営しています。

活動内容は、こころのケアの総合的なコーディネート、

岩手県こころのケアセンター 副センタ―長 **大塚 耕太郎** 

(災害・地域精神医学講座 教授)



被災者に対する相談・支援活動(相談室・訪問)、こころのケアに関する普及啓発、人材育成・研修、支援者支援、こころのケアに関する調査・研究などを行ってます。

平成26年度の実績として、連絡会・検討会が2,354回、

被災者に対する相談対応が 10,747 件、住民への健康教育(普及啓発)が 379 回、人材育成のための専門研修会が 171 回、支援者支援(従事者のケア 4,217 件、研修会 105 回、事例検討 34 件、市町村等へのスーパーバイズ 3,149 件)を行っています。

平成27年度も継続して支援しており、外部組織との連携では、県、厚労省、東北厚生局、復興庁、内閣府、地方振興局及び保健所などと実務の連携を取っています。

運営協力機関として、岩手県医師会や岩手県精神科病院協会、岩手県立病院精神科運営会議などと協力して運営しているほか、相談室医師派遣として、県内外病院・学術団体の他、全国精神科講座担当者会議の24大学から派遣していただいています。

今後の展望は、未だ被災地では2万人以上が応急仮設住宅で生活を送っている一方、仮設住宅から公営住宅や自力再建での自宅への移動が始まっており、訪問相談などのケアをする場所が増えています。被災地においては、生活の困難さやストレスは持続しており、生活再建支援金の申請でも、自力再建での加算金申請は44.1%にとどまっており、半数以上が自力再建が困難であることがうかがえます。

今後数年にわたり、仮設住宅から復興住宅等への移動 や医療費の負担、経済的自立など被災者を取り巻く状況 は、まだまだ厳しく、持続的なストレスにさらされると 思います。

また、被災地の勤労者のストレス加重も継続しています。被災地住民の生活基盤は弱く、高齢化率も高い。加えて、行政の財政力指数、医療基盤も厳しい状況であり、支援をしながら幅広いメンタルヘルス対策を長期間続けなければいけないと考えています。現段階でも、センターでの相談対応については、一定のニーズが継続しています。

また、被災者の相談では、医療費の減免措置等の制度 や支援が無くなった場合、医療費の自己負担への負担感 が大きく、減免措置がないと受療抑制の可能性もあり、 減免の継続が望まれるところです。

平成 26 年度、全国自殺率ワースト1になってしまった現状はありますが、今年度は現在までのところ 50 件程度減少しており、大幅に減少する見込みです。(内閣府自殺対策推進室の速報で、警察庁自殺統計によると平成 27 年は自殺者数が前年比で 61 人減の 313 人で、ワースト1を脱却し、減少率は 16.3%で減少率では全国で4番目でした。)この状況から、6 月に公表される人口動態統計では、自殺者数が 300 人以下となる見込みです。

自殺対策を通じて災害精神医学や地域精神医学の予防 的アプローチのノウハウを構築できればと考えています。

#### Report 4 いわてこどもケアセンター

いわてこどもケアセンターは、平成23年6月から岩手県が沿岸3地域に順次設置した子どもの心のケアセンター事業を引き継ぎ、新たに、子どものこころのケアを中長期的にわたって担う全県的な施設を、平成25年5月に本学に委託設置しました。

元々は児童相談所や保健所の施設を借りて行っていた ものを、それぞれ沿岸地域の県立病院の中にブースを置 かせていただいたというところが大きな変化でした。

岩手県こころのケアセンターや高田診療所、地元医師会、学校、児童相談所など子どもの支援機関と緊密に連携して運営してきました。

設置場所ですが、矢巾キャンパスのマルチメディア教育研究棟1階を使わせていただいているという状況で、日本赤十字社を通じ、クウェート国からの救援金により整備しました。

いわてこどもケアセンターは、子どものこころのケア をする施設ではありますが、同時に診療を行うクリニッ

#### いわてこどもケアセンター 副センタ―長 **八木 淳子**

(神経精神科学講座 講師)

ク機能を持った支援施設です。

県から委託を受けており、平成30年度(復興計画期間) まで現在と同じ規模で運営する予定となっています。

主な事業内容は、①児童精神科クリニックにおける診療と沿岸地域への巡回診療(中央センターから沿岸ブランチにブースを置かせていただいて、チームを週1回派遣している)、②内陸部の子ども(沿岸からの避難者を含む)の診療、③児童精神科医等専門職スタッフの養成確保、④支援者への研修等による支援・人材育成、となります。

診療実績ですが、新患の数では、平成23・24年度に 比べ平成25・26年度は大幅に患者さんの数が増えまし



た。3年目となる今年度の前半は、新患数が非常に減っていますが、新患自体は半年待ちという状況です。これは、全体的に患者さんの数が増えて、新患が入れないという事態によるものです。需要という点では、認知されてきたという部分もあり、増える一方となっています。述べ受診件数も増えてきているところですが、新患の割合で、最初は小学生や未就学児の割合が高く、センターを運営するにつれて、中学生・高校生が増えてきたというのが特徴です。

診療だけでなく、人材育成の研修会も各地で開催しています。平成25年度は23回実施し、述べ738人が参加、平成26年度は19回実施し、述べ1,000人が参加しました。研修会では、他職種症例検討会が行われました。これは、沿岸地域を中心に教員やこころのケアの専門職の方の参加が多く、地域で症例検討してノウハウを伝えていくという方法で、医師の少なさを補完する目的で行われています。

関係機関とも連携しており、岩手県から運営支援のために職員がワーカーとして駐在しています。

岩手県医療局には各県立病院における場所の確保とい う面で協力いただいているほか、岩手県教育委員会とも 連携し、センターから講師を派遣したり、スクールカウンセラーの会議へスタッフを派遣し、支援しています。

学内組織との連携では、附属病院各診療科とは患者さんの紹介、小児科学講座とは児童相談医がいない沿岸への医師派遣という形で協力しているほか、岩手県こころのケアセンターとも定期的に情報交換を行っています。

患者さんの増加や各種事業によって、常勤医が発達障害の増加になかなか対応出来ない状況があり、全国医学部長病院長会議から児童精神科に実績のある医師派遣の協力をいただいています。派遣された医師の協力のもと、「発達ドック」というものを行っており、1日で診察・検査・診断までを行うシステムを構築しています。

今後の展望ですが、岩手県からの委託の継続については、当面、平成30年度まで事業実施の予定ですが、その後どうするのかという課題があります。平成31年度以降の事業実施については、病院移転後の体制や県・国の動向を見ながら検討していきたいと考えていますが、当センターの特長として、東日本で唯一のトラウマセンターとしての強みを生かして、人材を増やしていきたいと考えています。

#### Report 5 東日本大震災被災者大規模コホート研究

本研究では、東日本大震災津波で甚大な被害を受けた 大槌町、陸前高田市、山田町、釜石市の協力を得て、研 究に同意した被災地住民1万人の健康調査を実施し、健 康状態の改善度・悪化度を客観的に評価し、①被災者に 適切な支援を継続して実施しようとすること、②追跡研 究により震災の健康影響を縦断的に評価できる体制を構 築することを目的にしています。

平成 23 年度は 10,475 人、平成 24 年度は 7,616 人、 平成 25 年度は 7,136 人、平成 26 年度は 6,720 人に同 意いただきました。

居住形態に関する調査では、こころの健康の項目においては、いずれの地域においても、プレハブ・みなし仮設に住んでいる方で心理的苦痛を感じている割合が高かったことが分かりました。また、不眠の項目においても、プレハブ・みなし仮設に住んでいる方のアテネ不眠尺度(自分の不眠の度合いをはかる目安)が良くない状態にあることが分かりました。

このプレハブ・みなし仮設に住んでいる方は、これら

衛生学公衆衛生学講座教授 坂田 清美



の他にも、肥満の増加率が明らかに高いことや運動量が 不足していることなど、色々な健康状態に影響を及ぼし ていることが分かりました。

外部組織との連携状況は、分担研究者として、岩手看護短期大学、東京大学、国立健康・栄養研究所、岩手県、岩手県予防医学協会の各機関と協力して研究を行ってきましたが、来年度から、藤田保健衛生大学にも加わっていただく予定です。

本研究は、平成32年度まで実施する予定となっており、脳卒中・心疾患の発症登録調査について、レポート任継できるような体制を作るほか、介護情報・レセプト情報調査もリンクして活用していきたいと考えています。

#### Report 6

#### いわて東北メディカル・メガバンク事業

東北メディカル・メガバンク事業は、①被災地域における医療面からの復興支援、②健康情報とバイオマテリアル(生体試料)を収集し、バイオバンクの構築、③健康情報とバイオマテリアルを用いた解析による次世代個別化医療(発症予測と予防・治療法)の開発、を事業の3本柱としています。

震災ストレスに係るバイオバンクの構築は、世界で初めてとなります。組織は、以下のとおりです。

元来は、文部科学省と本学の間で連携していましたが、 昨年から日本医療研究開発機構(AMED)とも連携し、 事業を推進しています。東北大学と本学は、両大学の学 長や機構長等から構成される東北メディカル・メガバン ク計画推進合同運営協議会により、緊密な連携体制を構 築しています。

いわて東北メディカル・メガバンク機構は、災害復興 事業本部のもと、6部門と事務局から構成され、専任教 職員と非常勤職員合わせて138名で運営しています。

地域住民コホート調査は、岩手県においては3万人を 調査することとしておりますが、3世代調査は東北大学 に協力する形となっています。

コホート調査で得られたゲノムの解析は、エピゲノム (メチル化)とトランスクリプトームを対象としており、 環境要因、特に震災ストレスにおいては、エピゲノム変 異は精神神経疾患や生活習慣病、脳卒中などに関わるの で、次世代個別化医療に繋がることを期待しています。

地域医療支援(医師派遣)についてですが、現在まで

#### いわて東北メディカル・メガバンク機構 機構長 **祖父江 憲治**

(副学長、神経科学研究部門長)



に県立の沿岸4病院に延べ8名を派遣しています。

地域に密着した医療支援活動として、サテライト(久慈・宮古・釜石・住田・矢巾)を設置し、地域住民の健康調査(リクルート)基地とするほか、地域での健康意識の向上活動を行っています。

岩手県内の20歳以上の男女3万人を対象とする地域住民コホートでは、2つのタイプの調査を行っています。1つ目が特定健診に参加いただいた方にご協力いただく特定健診参加型調査、2つ目がサテライトに来ていただいて調査を行うサテライト型調査です。特に、サテライト型調査では詳細な生理学的な検査(呼吸機能・動脈硬化・骨密度・眼検査等)を行うことができます。平成25年度からこれまでの調査の進捗状況ですが、特定健診参加型調査は22,924名、サテライト型は4,095名に参加いただいており、合計して目標の3万人まで3,000名弱のところまで来ています。平成28年1月には目標を達成できるのではないかと思っております。

コホート調査で大事なことは、健康調査をすると同時に、参加いただいた方の追跡調査を行うことで、第1次の事業をしっかりと完了し、第2次の事業を開始するべく努力していきたいと考えております。

#### Report 7

#### 革新的医療機器開発支援センター

革新的医療機器開発支援センターが行う東北発革新的医療機器創出・開発促進事業は、産学官連携による革新的な医療機器の開発を目標とする事業ですが、医療機器開発企業の誘致を通じた被災地の復興を目指すものです。

開発プロジェクトは、①急性肝不全用の一体型個人用 血液濾過透析機器の開発、②脳内留置型微細内視鏡の臨 床試験研究、③いわて発高付加価値コバルト合金を用い た整形外科用インプラントの開発、④通信機能付充電式 持続気道陽圧治療(nCPAP)装置および補助口腔内装置 革新的医療機器開発支援センター センター長 **酒井 明夫** 

(病院長、神経精神科学講座 教授)



の開発、⑤高精度超音波画像診断装置の開発、⑥不安定 プラークの血液診断薬の開発、6テーマです。

本学では、災害復興事業本部のもと、革新的医療機器 開発支援センターを設置し、各テーマの進捗管理や出口 戦略の検討、薬事申請に係る調査・支援・人材育成、な どを行っています。

次に、各テーマの進捗状況を報告します。

①についてですが、これは、透析の専用設備を有しない施設でも急性肝不全の血液濾過透析を可能とする機器を開発する事業です。これは簡単に言うと、水道水さえあれば血液透析が可能になるものです。事業成果は、治験機器が完成しており、関連学会において研究成果を発表しています。今年度は、医師主導治験を実施中であり、全国の6大学病と連携して進めていますが、対象疾患である急性肝不全(昏睡型)の発症頻度が低いということもあり、現在2例の登録に留まっており、更なる促進が必要です。

②についてですが、これは、脳外科手術時の蛍光血管造影を可能にする微細かつ柔軟な脳内視鏡を開発する事業です。術野内の深部や裏側の血流を確認することが可能となる装置です。事業成果は、プロトタイプが完成しており、関連する特許を2件出願しています。今年度は、プロトタイプから最終製品形態へ向け製品の開発を進めるほか、動物研究センターにて有効性・安全性の評価を行っております。

③についてですが、岩手発のコバルト合金(極低 Ni-CoCrMo 合金)を活用し脊椎インプラントを開発する事業です。日本人の体格に合った低侵襲インプラントの開発を進めています。事業成果は、最終製品まで完成させており、研究成果の論文発表を併せて行っています。今年度は、最終製品を用いた機械的安全性試験、生物学安

全性の試験を実施しています。

④についてですが、停電時や外出時に使用できるバッテリー内蔵型持続気道陽圧治療装置(CPAP)を開発する事業です。データ管理のための通信機能を持ったCPAP装置です。事業成果は、最終製品の設計まで行われており、研究成果も論文として発表されています。今年度は、CPAP装置と口腔内装置との併用に関する臨床試験を行っています。また、設計をもとに量産に向けた作り込みが行われており、事業終了までに市販型が完成の予定です。

⑤についてですが、リンパ節内の血管増生を観察することにより、がんの転移を診断できる超音波画像診断装置を開発する事業です。事業成果は、画像解析用ソフトウェアを完成させており、関連特許の出願を行っているほか、研究成果の発表を国際学会で行っています。今年度は、既存の超音波撮影法と本造影超音波法との比較試験を全国9施設で実施しています。

⑥についてですが、脳梗塞の原因となる頸動脈プラークの危険度と動脈硬化症の進行度を示す血液診断薬を開発する事業です。事業成果は、プロトタイプが完成しており、関連特許の出願を行っているほか、関連学会で研究成果の発表を行っています。今年度は、昨年度まで実施していた臨床研究で取得したデータの解析が行われているほか、解析されたデータをもとに本開発品の薬事に関する相談を進めています。

#### 編集委員コーナー№4「岩手山麓探訪」

岩手山周辺では春浅い4月、かたくり、水芭蕉、ざぜん草(写真1・2)、小岩井の一本桜、夏は牧場ののどかさを感じながらの鞍掛山軽登山、秋には葛根田玄武洞付近の紅葉、冬には網張、岩手高原、雫石、リゾートの各スキー場、多くの温泉は年間を通じて日帰り入浴ができます。 さらに、手打ちの蕎麦屋さん、湧き水を汲める水場、カフェ、パン屋さんもありますので探してみて下さい。

岩手山はどの角度から観ても趣があるのですが、岩手山麓南側の「春子谷地湿原」には、宮沢賢治の「きみにならびて野にたてば」の詩碑があり、この場所は岩手山からの風を"賢治"になった気分で感じることができ、さらに雄大で美しく眺望できます(写真3・4)。

このように、四季を通じて岩手山は私を癒し、元気をくれる、 とても大切な存在です。夕暮れ時の岩手山の稜線が私は特に 好きで、毎日仰ぎ観ることができる幸せを感じています。

(編集委員 小山 薫)



写真1(ざぜん草)



写真2(水芭蕉)



写真3



写真4

# SODJCS

#### 第1回岩手医科大学跡地活用検討懇話会が行われました

12月3日(木)、創立60周年記念館10階同窓会 室において、第1回岩手医科大学跡地活用検討懇話 会が行われました。

岩手医科大学跡地活用検討懇話会は、内丸地区病院 跡地の将来的な利活用について、当該地が県都盛岡に おける行政、金融、情報、医療などを集約した中心市 街地に位置することから、岩手県・盛岡市・盛岡商工 会議所・本学の四者での協議だけでなく、多くの方か ら多様なご意見をいただき、今後の検討に反映させて いくことが重要であるとの考え方に基づき、昨年11 月に設置されました。都市計画をご専門とする南 正昭 岩手大学工学部教授を会長とし、医師会・地元企業・ 町内会・NPO関係者の代表9名の委員から構成され ています。

第1回目となる今回は、始めに、小川理事長・

遠藤法人顧問・藤島盛岡市都市整備部長から、移転 事業や内丸界隈の土地の歴史、近年の動向、これま での検討経過等について説明が行われました。

続いて、南会長から、「県都の中心部にこれほどの 土地が生まれることは無く、何百年に1度のチャン スと捉えている。活発な議論を期待したい」と呼び 掛けられました。

意見交換では、「『健康』を大きなテーマとして検 討してはどうかし、「様々な世代の人々が集う施設に すべきだし、「官庁街ということもあり、休日の内丸 地区は寂しい。『彩り』ある建物にしてほしい」といっ た幅広い意見が出されました。

今回交わされた意見は、本年2月の岩手県、盛岡市、 盛岡商工会議所と本学の四者で構成する検討会議で 報告される予定です。



冒頭に挨拶を述べる小川理事長



意見交換の様子

#### 平成27年度クラブ活動報告会が行われました

12月7日(月)、矢巾キャンパス大堀記念講堂 において、平成27年度クラブ活動報告会が行われ、 小川学長・祖父江副学長をはじめ、各学部の学生 部長、各クラブの部長及び学生が出席しました。

報告会では、総務局・体育局・文化局各代表の 学生から、今年の活動報告と来年の行事予定や抱 負が述べられました。

続いて、今年行われた各種体育大会で優秀な成 績を収めた団体、学友会活動に貢献した文化部及 び前学友会役員へ表彰が行われました。



前学友会役員の表彰

#### 西病棟5階Aでクリスマス会が行われました

12月24日(木)、西病棟5階のプレイルームにおいて、平成27年度クリスマス会が行われました。

この会は、西病棟5階Aに入院されている子供やその保護者の方にクリスマス気分を味わっていただけるよう毎年行われています。

始めに青松支援学校の生徒さんによるクリスマスにちなんだ曲の演奏が行われ、生徒さんが一生懸命奏でるメロディに、時折涙を浮かべながら聞き入る方もいました。その後、西病棟5階Aスタッフによるクリスマスソングの合唱、選抜看護師による「恋するフォーチュンクッキー(AKB48)」のダンスが披露され、会場はあたたかな空気と笑顔に包まれました。



西病棟5階Aスタッフによるダンスの披露

#### 平成27年度高大連携事業ウインターセッションが行われました

12月26日(土)・27日(日)の2日間、矢巾キャンパス及び内丸キャンパスにおいて、いわて5大学(岩手大学、岩手県立大学、盛岡大学、富士大学、本学)と岩手県教育委員会が主催する高大連携ウインターセッションが行われました。

ウインターセッションは、高校生が大学に触れる 機会を広く提供することで、進路意識の高揚と学力 の向上につなげると同時に、高等学校と大学の連携 を円滑にし大学の魅力を高めることを目的に、平成 15年から行われています。

今年度は、県内の高校生95名が医・歯・薬学部の講義や実習を体験し、最終日には受講生一人ひとりに修了証書が手渡されました。体験後のアンケートでは、「大学で学んでいる内容をその場所で学べる新鮮さと内容に満足しました」といった感想が寄せられました。



全学部共通講義 小川 彰 学長 「大学で何を学ぶのか」



歯学部 解剖学講座 機能形態学分野 藤村 朗 教授 「『噛む』仕組みについて知ろう!」



医学部 神経精神科学講座 大塚 耕太郎 講師 「精神医学のfront line」



薬学部 前田 正知 薬学部長 「薬学を学ぼう」

# シリーズ **か**(No.96)

外科学講座は、2006年7月の講座再編にともない、 外科学第一講座と外科学第三講座の小児外科が統合と なり、講座員は、大学在籍34名、大学院5名、短期・ 長期出張者13名です。診療・研究グループは、内視鏡外科・ 肝胆膵、食道、胃、下部消化管、乳腺、高度救急救命 センター、リサーチから編成され、連携・協力しながら 診療を行っています。

年間の総手術件数は1,200例を超えており、この20年間で約2倍に増加しています。手術では、患者のQOL向

上と内視鏡の拡大視効果による精度の高い低侵襲手術を目的として、大部分の疾患に内視鏡外科手術を実施しています。

この一方で、特定機能病院の役割である先進的な高度医療なども積極的に行っており、2007年に開始した肝移植数は、67例(生体62例、脳死5例)となりました。今後も診療能力の向上と研究の推進ができるような教室作りを目指していきたいと思います。

(教授 佐々木 章)



平成24年4月の歯学部改革にともなう講座再編により口腔顎顔面再建学講座歯科麻酔学分野となりました。現在の講座員は、城茂治教授をはじめとする教員6名、常任研究員8名、大学院生2名の16名です。

日々、私たちは中央手術室での口腔外科手術時の 全身麻酔、外来での歯科治療時の精神鎮静法やモニ タリング、三叉神経痛などのペインクリニックなどの業 務に奮闘しています。2014年からリラックス外来が開 設され、歯科治療が怖い患者さん、嘔吐反射の強い 患者さんや高血圧症を有する患者さんなどに安全で 快適な歯科治療を提供するための精神鎮静法やモニ タ管理が効率よく実施できるようになりました。

研究では全身麻酔薬、局所麻酔薬や精神鎮静薬が 全身、局所に及ぼす影響を、Ca<sup>2+</sup>イメージング法や脳 機能MRIを用いて、それぞれの薬剤の各種血管平滑 筋、末梢の神経細胞に対する作用機序や精神鎮静法 時の健忘効果について研究を行っております。

より多様化していくこれからの歯科医療の中で、複数科連携のチーム医療の要となるよう医局員一同診療に励んでおります。

(特任准教授 佐藤 健一)



#### ミニコラム

#### クリスマスと年始の病院食

附属病院の栄養部では、年に20回ほど歳時 にちなんだ行事食を提供しております。

今年も季節を感じながらも患者さん一人ひと りに合わせた食事にご好評をいただきました。



クリスマスメニュー (ミニトマトのサンタ☆)



おせち料理 ※透析食 (赤飯やおそばがつきます)

#### 理事会報告 (11月定例-11月30日開催)

#### 1. 教員の人事について

医学部 外科学講座 准教授 肥田 圭介 (前 同講座 特任准教授)

(発令年月日 平成28年1月1日付) 医学部 産婦人科学講座 准教授 熊谷 仁 (現 秋田大学医学部附属病院周産期センター 特任准教授) (発令年月日 平成28年4月1日付)

歯学部 口腔医学講座予防歯科学分野 准教授 阿部 晶子 (前 同分野 特任講師)

(発令年月日 平成28年1月1日付)

2. 看護学部教員の人事について

- 3. 平成27年度給与改定及び12月期末勤勉手当等の支給について
- 4. 経理規程の一部改正について

4月1日付で岩手看護短期大学が本法人に移管されることに伴う経理規程の一部改正について承認

(施行年月日 平成28年4月1日)

5. 組織規程の一部改正について

各役職の選考への学長の関わり方に関し、文部科学 省が推進する大学のガバナンス改革に基づく形で変更 すること及び各役職の選考に関する文言を統一するこ とを趣旨とした組織規程を一部改正について承認

(施行年月日 平成28年1月1日)

#### 《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰 菊池 初子 影山 雄太 江刺家和恵 松政 正俊 佐々木さき子 齋野 朝幸 米澤 裕司 佐々木忠司 小山 薫 藤本 康之 畠山 正充 佐藤 仁 大須賀志穂 欣弥 武藤千恵子 成田 山尾 寿子 野里三津子

#### 編集後記

関東から岩手に来てまもなく9年になります。今冬は雪が少なく、例年よりも少しだけ暖かいようです。2月いっぱいまで、あとひと月ほどすれば、何とか冬場をのりきれるように思います。今号がみなさまのお手元に届いてから、少しずつですが寒さがやわらいでいくのではないかとワクワクしております。えっ! この程度の寒さはまったく平気ですか? 冬や雪が大好き?? 大変失礼いたしました。

(編集委員 藤本 康之)

#### 岩手医科大学報 第472号

発行年月日 平成28年1月31日 発行者 学長 小川 彰 短 集 岩毛医科土岩和短锥香毛

編 集 岩手医科大学報編集委員会 事務局 企画部 企画調整課

盛岡市内丸19-1

TEL. 019-651-5111(内線7023) FAX. 019-624-1231

E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷河北印刷株式会社盛岡市本町通2-8-7

**TEL. 019-623-4256** 

E-mail: office@kahoku-ipm.jp



## スポット医学講座

形成外科学講座 講師 長尾 宗朝

No. 62



#### 血管腫と血管奇形のお話

血管腫は、従来の赤ちゃんが生まれて間もなく 皮膚表面の血管が増えて赤く盛り上がる乳児血管 腫(いちご状血管腫)と呼ばれるものや、その他 にも皮膚の表面から深いところの血管が変化して 異常な固まりになる血管奇形と呼ばれるものに分 類されるようになってきています。血管奇形はそ の血管の位置や流れによって、さらに毛細血管奇 形、静脈奇形、動静脈奇形、リンパ管奇形などに 明確に分類されることで、それぞれの症状に応じ た治療が可能となってきました。

岩手医科大学形成外科・血管腫血管奇形外来 においては、主に切除手術、レーザー治療、経 皮的硬化療法などの治療法を導入し、県内外か

血管腫・血管奇形 専門外来の御案内 これって血管腫? (当院における主な治療法) ・経皮的硬化療法: 切らないで病変を薬で固めます。 ・血管内治療: 放射線料の協力のもとカテーテル治療を行います。 レーザー: 主に表面の赤あざに効果があります。 ・切除術 (手術): 切って病変を取り除く治療です。 ・桑物療法: 飲み薬や注射で縮小するタイプもあります。 それぞれのタイプに応じた総合的検査、治療を行っています。 お気軽にご相談ください。 岩手医科大学 形成外科外来 每週末曜日 午後 (完全予約制) 田: 019-651-5111 (代表) 担当医師: 長尾 宗朝(ながお むねとも) ※出張等により、不在の場合もあります。詳しくは、外来受付へお問い合わせください。

図1:外来案内ポスター

らの患者さんの治療に当たっています。中には 混合型脈管奇形と言われるような難治性疾患で、 形成外科単独では治療が困難なケースもあり、 放射線科や小児科などに協力を仰ぎながら総合 的診療を展開しています(図1)。

毛細血管奇形(赤あざ)の治療においては、 麻酔薬やレーザー機器の進歩により、ほぼ無痛 でレーザー治療が受けられ、治療後のやけども 劇的に少なくなりました。静脈奇形の場合、病 変を切って取り除く手術では、出血や傷あとが 問題となります。そのために治療困難と言われ てきたケースでも、経皮的硬化療法を行うこと で傷あとを作らずに、患者さんの体の負担も 少なく症状改善が得られています(図2)。また、 巨大な乳児血管腫などには従来ステロイド投与 などが行われて来ました。その副作用が問題と なる中で、近年、血圧を下げる薬の一つ(プロ プラノロール)に治療効果が認められ、治療必 要と判断される患者さんは適宜当院小児科に紹 介をさせて頂いております。

これまでに血管腫と言われながら治療をあきらめてきた方でも、医療の進歩により症状改善が期待できるようになってきているため、お悩みの方がいらっしゃいましたらご相談下さい。

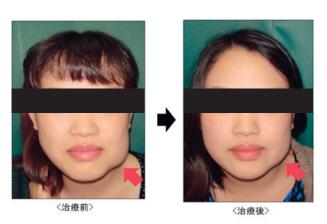


図2:硬化療法により左頬部腫脹が改善